



優秀賞

水島直文・橋本政宣 編注『橘曙覧全歌集』（岩波書店 1999年）

（中央新書・文庫コーナー：岩波文庫 黄-274-1）

文学部2年 三浦直人

中学2年の頃、電車通学の行き帰りに国語便覧を読むのが、ささやかなマイブームだった。中でも一番のお気に入り、橘曙覧の「たのしみはまれに魚烹（に）て児等（こら）皆がうましうましといひて食ふ時」という一首だった。「うましうまし」が可愛くて、この歌が頭から離れなかった。この一首が、「独楽吟」と呼ばれる52首の内の一つであることは、高校2年の時に知った。

橘曙覧は、清貧思想の体現者としてその名を知られる、幕末期の歌人である。雨露をしのぐのに精一杯の家屋で、味わい豊かな1300首を生み出した。無論、中野孝次『清貧の思想』にも、その名が挙がっている。「たのしみは」で始まり「時」で終わる52首は、齋藤孝ふうに表現するならば、橘曙覧の“偏愛マップ”だ。小さな宇宙に無限の楽しみを見出す——橘曙覧の生活観がよく反映されている。

「たのしみは百日（ももか）ひねれど成らぬ歌のふとおもしろく出できぬ時」

「たのしみは朝おきいでて昨日まで無かりし花の咲ける見る時」

「たのしみはそぞろ読みゆく書（ふみ）の中（うち）に我とひとしき人をみし時」

清貧の世界を楽しむには、卓越したセンスとエネルギーが必要だ。橘曙覧は、全力で笑い、歎き、怒ることで、日々の生活の全てを、清貧を楽しむテクニックへと昇華した。俗世間への諦観とは異なる、エネルギッシュな隠棲生活である。膨大な書を写し終えた充足感に浸り、焼き豆腐に舌鼓を打つ。一方で、とりあえず1カ月分の米を確保して安心したり、嫌なヤツがさっさと帰ったりするのも「たのしみ」に含まれる。悲壮感の無い、圧倒的な強さを持つ人生観だ。

我々はより善く生きようとする時、宗教や哲学などの、大きな“善く生きる”ばかりを論じがちである。他方で橘曙覧は、小さな“善く生きる”を徹底して追求したと言える。我々も、胸中に各自の「独楽吟」を温め、小さな“善く生きる”を実践していくべきなのかも知れない。そう言えば、橘曙覧が住んだ福井藩の藩主・松平春嶽も、「たのしめる歌」50首を作り、曙覧に見せたことがあるという。

「独楽吟」以外の作品全てに触れてみよう、と考えたのは今年の初め、大学2年になってからのことだ。蛇が頻繁に出没する家屋に、妻が文句を言う。すると曙覧は、「おそろしき世の人言（ひとごと）にくらぶれば透迨（はひ）いづる虫の口はものかは」とユーモア溢れるコメント。この歌集を紐解くことで、震災後を生きる我々のヒントになるような、曙覧の実生活を垣間見ることが出来る。

ところで、つい先日、現行の小学校国語教科書に、「独楽吟」が掲載されているのを発見した。「この教科書、なかなか良い仕事をしているじゃないか」と、嬉しくなった。僕が胸中の詞華集に書き留めた「うましうまし」の歌のように、小学生の心にも橘曙覧の一首が刻まれる。彼らもまた、これからの長い人生で、自らの「独楽吟」を一つ一つ発見していくのだろう。そんな近未来に思いを馳せると、何だか自然と「たのしみ」になってくる。